

社会問題と相互行為

「曖昧な生きづらさ」とクレーム申し立ての社会学

2007年7月

草柳 千早

社会問題と相互行為
「曖昧な生きづらさ」とクレイム申し立ての社会学

—目次—

序	1. 本論の問題意識	i
	2. 理論的パースペクティブ	ii
	3. 社会問題研究と日常生活研究	iii
第一章	社会問題研究における「クレイム申し立て」アプローチの再考	1
	1. はじめに	1
	2. 社会問題研究における「クレイム申し立て」へのアプローチ	2
	3. リアリティ定義としての「クレイム申し立て」	4
	4. 「問題」をめぐるリアリティ定義の競合	6
	5. 三重の定義	9
	6. 何が「問題」なのか	10
	7. 「社会問題」の「構築」されない過程	12
第二章	「クレイム申し立て」はいかにして可能か	16
	1. はじめに	16
	2. 「クレイム申し立て」はいかにして可能か、という問い	16
	3. 「社会問題」を定義する	18
	4. 「社会問題」について語る	20
	5. 語彙とスタイル	24
	6. 攻防はすでにはじまっている	26
第三章	「問題経験」の語られ方	32
	1. はじめに	32
	2. 課題と時代	33
	3. 「強い」言説より曖昧な過程へ	36
	4. 言葉への違和感とともに語る	38
	5. 問題経験と社会	43
第四章	「生きづらさ」と「アイデンティティ」	49
	1. はじめに	49
	2. 「モノポリー」モデル---ゴフマンにおけるスティグマ所有者	50
	3. 「肯定主張」モデル---マイノリティのアイデンティティ・ポリティクス	51

4.	二つのモデルと現代日本	52
5.	「アイデンティティ」と「生きづらさ」	52
6.	「生きづらさ」と社会	56
7.	生き方の多様性と社会	58
第五章	「現実」の「問題」化を無効にする方法	66
1.	はじめに	66
2.	「夫婦別姓」という「問題」	66
3.	反論の方法	68
4.	リアリティ分離に臨む	75
5.	自己の経験と歴史	77
第六章	排除される自己・境界を越える自己	83
1.	はじめに	83
2.	ゴフマンにおける相互行為と秩序	83
3.	相互行為秩序論の構成---秩序と排除	84
4.	秩序と自己---過剰なもの	86
5.	境界を越える自己	89
第七章	身体・相互行為秩序とその攪乱	94
1.	はじめに	94
2.	とり乱すということ	95
3.	ゴフマンの相互行為秩序論と身体	97
4.	経験と相互行為秩序	100
5.	出会いにおいてとり乱すこと	101
6.	相互行為秩序の攪乱としてのとり乱し	102
7.	世界の亀裂と境界の引き直し	104
8.	身体と相互行為秩序	105
9.	いまここの身体	106
第八章	社会の現状を問題化する試み	109
1.	はじめに	109
2.	「クレーム」という対象	109
3.	「すべての語りはクレームを申し立てる」	111
4.	政治的産物としての研究対象	111
5.	「社会の現状を問題化する試み」はいかにして周縁化されるか	112
6.	没「問題」的な状況とは何か	116
7.	「意味をめぐる闘争」における社会的現実構成	117

第九章	社会問題研究と日常生活の自明性-----自明性への問いにむけて	124
1.	はじめに	124
2.	社会問題研究と日常生活の自明性	124
3.	日常生活における自明なものの経験とクレイム	126
4.	自明性とクレイムの排除	127
5.	自己におけるクレイムの可能性	129
6.	相互行為過程における発話とその意味づけ	130
7.	クレイムと主体	131
8.	自明性への問い---今後にむけて	132
終章	今後にむけて	137
引用・指示文献一覧		142